

1985.5.26

●時評 ●
正念場を迎えた

比相紋押捺制度撤廃運動

外国人登録法における指紋押捺の不当性はもはやあきらかである。内外の世論も、廃止にむけて動いている。五月に入つて法務省は、在日朝鮮人をはじめとした廃止要求運動を押さえつけるために、一方で制度の手直しをはかるとしながら、指紋拒否者に対して新たな報復措置をとろうとしている。

警察は、五月八日の李相鎬氏の件にみられるように、自治体の告発がないのに任意出頭に応じないとして逮捕するというような強圧的な態度にでてきていている。大阪においては、五月二日に朴愛子さんに対する度重なる呼び出しに抗議する行動に際し、二人を逮捕し、一人に八針の傷を負わし、抗議行動に参加したメンバーの車いすを壊すことまでしている。

このよな中で、去る五月一〇日、大阪府警外事課の富田五郎課長の差別発言がなされた。午後6時のテレビ朝日系（関西6チャンネル、関東10チャンネル）ニュースで放映されたもので、最近、警察の圧力が加わっている高槻市の李敬宰氏を中心に指紋押捺問題がとりあげられた中での発言だった。記者の「大阪府警として、今後の方針といいますか、どんなお気持で臨

まれるのか、最後に、ひとつお尋ねしたいのですか？」という質問に次のよう答えたのである。

富田五郎課長　まあ、あの、新聞その他の情報によりますれば、かなり、世論に左右されましてですね、各行政機関が、弱気になつていて、これはやはり私が考えるのは、日本の法体系に対しても外国人になめられていて、この、そういう気がしてならないのですね。やはり、日本に居住したいと思えば、法律が現存する以上、それを守つてもらわなければならぬ。そういう法体制がいやであれば、これは自分の国へ帰ればいいわけですね。又、あの、日本で生まれ日本人と同じように育つたとおっしゃいますが、こういう方は、日本に帰化すればいいんですね。そういう方法があるわけですから。だから、まあ、法をないがしろにするという行為は、これは、厳として、我々としては、法の定めるところに従つて措置していくと、こういう考え方でございます。

各方面から抗議の声があがつたのも当然の事で翌日の朝日新聞朝刊には外事部長の、夕刊には本人である富田五郎課長のお詫びのコメントが掲載された。聞くところによると、テレビ録画の段階ですでにこの発言

1985.5.26

は問題となり、大阪府警側はその部分を削除してくれるように頼んだという。しかし朝日テレビ側はそのまま放映し、最後にアナウンサーが「富田課長のこのようないい発言は在日外国人の誇りを傷つけるものであり、在日外国人とつきあう時のマナーに問題があると言うのが実態なのではないのでしょうか」というコメントをつけたのである。

この富田発言に抗議の声が集まっている一方で、早くも五月二三日の『週刊新潮』では、日本朝鮮研究所の佐藤勝巳氏の「指紋押捺の本当のネライは北の工作員で、必要悪」という発言等をもとに、「いやなら帰れ」発言悪いか——押印法変更して御機嫌伺い」という記事を掲載している。

このような中で法務省は、五月一四日、「外国人登録事務の適正な運用について」という「通達」を出した。その前文には、「在留外国人の間現行法を無視したことさら指紋押捺を拒否する者があり、これに体する市区町村の対応にも適切を欠くと認められる事例が見られる。(略)政府が今国会外国人登録法改正案を提出する方針を決定した事実はない。ついでには、本年はいわゆる大量切替年に当たるところもあり、この際、現行指紋押捺制度の趣旨をより一層周知徹底し、外国人登録事務の適性、円滑な遂行を図るために下記のとく

り通達する」とある。

ここには、例えば、回転指紋をやめインクにかわる液で指紋を押すなどの「譲歩」ともみえる部分がある。しかし、これまで指紋押捺拒否者に再入国許可を出さないという不当な報復処置に加えて拒否者には、①三ヶ月間、登録証明書を出さず「交付予定期間指定書」を交付する、②その後、保証人二名をつけ「指紋不押捺」と赤字で記入した登録証明書を交付する、③登録證明書(日本人の住民票にあたる)を出さない、④指紋押捺拒否後一年を経過している場合には直ちに告発せよ等の内容が含まれている。

外国人登録事務が国の「機関委任事務」であることは知られているが、登録證明書を発行するのは自治体独自の仕事であると考えられるし、指紋押捺を拒否した者に対する登録証明書を発行しないというようなことは外国人登録法のどこにも書かれていない。内外世論を気にしての、苦しまざれの「通達」といわざるを得ない。

七月より始まる一斉切替をひかえ、日本社会の排外性を象徴する指紋押捺制度撤廃のため、今こそ闘わなければならない。

(飛田雄一)

外国人登録法の抜本的改正を求める兵庫大集会(仮称)
●七月一六日(火) 午後六時三〇分
●会場 三宮・勤労会館大ホール